

最近の症例から (30) 自家骨移植部へのインプラント埋入

小松 史, 森 亮太, 植田 章夫

松本歯科大学 口腔顎顔面外科学講座

Recent Cases (30)

Implant Osseointegrated in Autologous Bone-Grafted Areas : A case report

FUJITO KOMATSU, RYOUTA MORI and AKIO UEDA

Department of Oral Maxillofacial Surgery, Matsumoto Dental University School of Dentistry

口腔領域の悪性腫瘍に対しては、必要に応じて顎骨の切除が必要となる。これらの症例では、顎骨の再建と術後の咀嚼機能の回復が問題となる。

一般的には、まず金属プレートで顎骨再建を行い経過の良好な症例に対して二次的に自家骨移植を行う。

今回われわれは、自家腸骨によって下顎骨の再建を行った後に、オッセオインテグレートドインプラントを埋入し咀嚼機能の回復をはかった症例を経験したので、その概要を供覧する。

(症 例)

患 者 : 67歳, 女性.

初診日 : 1996年7月9日

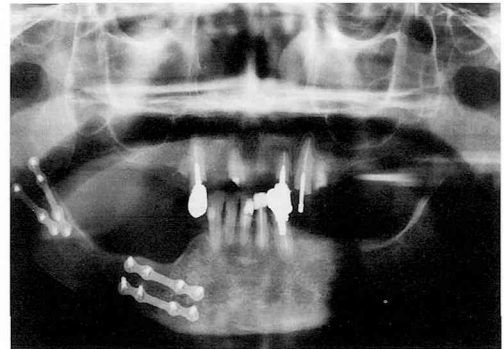


写真2 : 腸骨自家骨移植術後パノラマX線写真

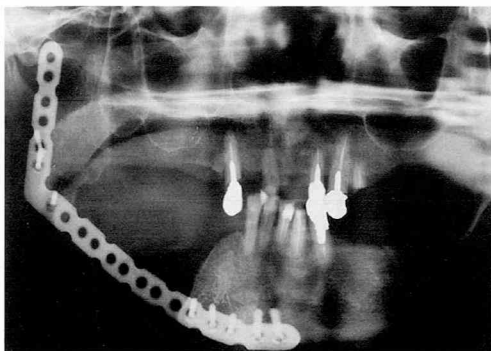


写真1 : 下顎骨区域切除術後1年4か月パノラマX線写真

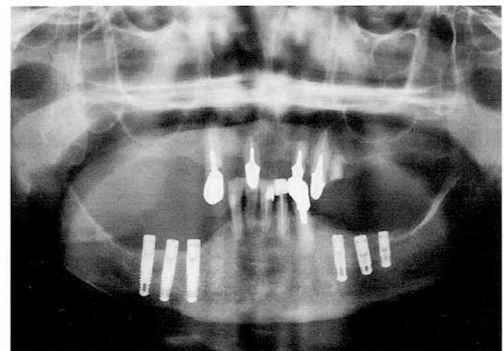


写真3 : インプラント体埋入術後パノラマX線写真



写真4 a: 上部構造体装着時口腔写真

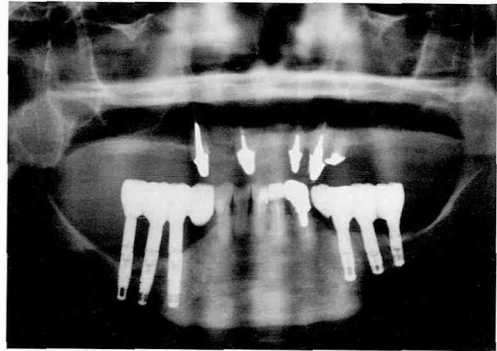


写真5: 上部構造体装着後1年経過時パノラマX線写真

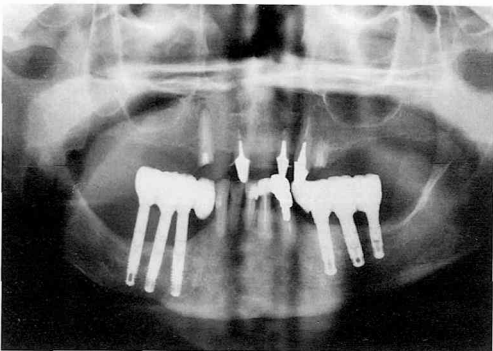


写真4 b: 上部構造体装着時パノラマX線写真

主 訴: 右側下顎臼歯部骨肉腫瘍の精査.

家族歴: 特記事項なし.

経 過: 骨肉腫の診断により右側上頸部郭清術, 右側下顎臼歯部顎骨区域切除術およびチタンプレート (小原, 東京) にて下顎骨の再建術を行った (写真1). 術後 methotrexate による化学療法も通法に従い1クール施行した. 術後1年4か

月経過し, 再発, 転移等認めず予後良好であったためチタンプレートと自家腸骨の交換を行った. なお, 移植骨の固定にはチタンミニプレート (Leibinger, Bonn) を用いた (写真2).

次に, 咀嚼機能障害の改善のために腸骨移植術後約6か月経過した段階で, チタンミニプレート除去と移植腸骨部と左側の臼歯部にオッセオインテグレートッドインプラント IMZ® (右側直径4.0 mm, 長径18 mm を3本, 左側直径3.3 mm, 長径13 mm, 11 mm, 10 mm) の埋入を行った (写真3).

インプラント1次埋入手術より約7か月後に2次手術と右側顎堤形成術を施行, 本学補綴科にて作製した上部構造体を装着した (写真4 a, b).

現在, 上部構造体装着後1年経過するもX線写真所見にて骨の異常吸収像は認められず経過は良好である (写真5).